

夏目漱石

ケーベル先生



ケーベル先生

木の葉の間から高い窓が見えて、その窓の隅からケール先生たばこの頭が見えた。傍わきから濃い藍色あいろいろの烟けむりが立った。先生は烟草たばこを呑んでいるなど余よは安倍君あべに云った。

この前此処ここを通ったのは何時いつだか忘れてしまったが、今日見ると僅まかの間にもう大分様子が違っている。甲武線こうぶせんの崖上がけうえは角並新かどなみらしい立派な家に建て易かえられて、何れいずも現代的日本の産み出した富の威力と切り放す事の出来ない門構ばかりである。その中に先生の住居すまいだ

けが過去の記念かたみの如くたった一軒古ぼけたなりで残っている。先生はこの燻くすぶり返った家の書齋はに這入はいったなりめったに外へ出た事がない。その書齋は取とりも直さず先生の頭が見えた木の葉の間の高い所であつた。

余と安倍君とは先生に導びかれて、敷物も何も足に触れない素裸ののままののぼ高い階子段を薄暗がりにながたがた云わせながら上つて、階上の右手にある書齋に入った。そうして先生の今まで腰を卸して窓から頭だけを出していた一番光に近い椅子に余は坐つた。そこで外面そとから射す夕暮に近い明りを受けて始めて先生の顔を熟視した。先

生の顔は昔とさまで違っていなかった。先生は自分で六十三だと云われた。余が先生の美学の講義を聴きに出たのは、余が大学院に這入った年で、慥たしか先生が日本へ来て始めて初めての講義だと思っているが、先生はその時から已すでにこう云う顔であつた。先生に日本へ来てもう二十年になりますかと聞いたら、そうはならない、たしか十八年目だと答えられた。先生の髪も髯ひげも英語で云うとオーバートンとか形容すべき、ごく薄い麻の様な色をしている上に、普通の西洋人の通り非常に細くつて柔かいから、少しの白髪が生えてもまるで目立たないのだらう。それに

しても血色が元の通りである。十八年を日本で住み古した人とは思えない。

先生の容貌が永久にみずみずしている様に見えるのに引き易えて、先生の書齋は耄^ぼけ切った色で包まれていた。洋書というものは唐本や和書よりも装飾的な背皮に学問と芸術の派出やかさを偲^{しの}ばせるのが常であるのに、この部屋は余の眼を射る何物をも蔵していなかっただ。ただ大きな机があつた。色の褪^さめた椅子が四脚あつた。マッチと埃^{エジプトたばこ}及烟草と灰皿があつた。余は埃及烟草を吹かしながら先生と話をした。けれども部屋を出て、下の食堂へ案

内されるまで、余は遂に先生の書齋にどんな書物がどんなに並んでいたかを知らずに過ぎた。

花やかな金文字や赤や青の背表紙が余の眼を刺激しなかつたばかりではない。純潔な白色でさえ遂に余の眼には触れずに済んだ。先生の食卓には常の歐洲人が必要品とまで認めている白布が懸っていなかつた。その代りにくすんだ更紗さらさがた形を置いた布きれが一杯いちぱいに被かぶさつていた。そうしてその布はこの間まで余の家にうち預かつていた娘の子を嫁かたづける時に新調して遣つた布団の表と同じものであつた。この卓を前にして坐つた先生は、襟えりも襟飾も着けて

はいない。千筋せんすじの縮みの襯衣しやつを着た上に、玉子色の薄い脊広せびろを一枚無造作に引掛けただけである。始めから儀式ばらぬ様にとの注意ではあつたが、あまり失礼に當つてはと思つて、余は白い襯衣と白い襟と紺の着物を着ていた。君が正装をしているのに私はこんな服なりでと先生が最前云われた時、正装の二字に痛み入るばかりであつたが、成程洗い立ての白いものが手と首に着いているのが正装なら、余の方が先生よりも余程正装であつた。

余は先生に一人で淋しくはありませんかと聞いたたら、先生は少しも淋しくはないと答えられた。西洋へ歸りた

くはありませんかと尋ねたら、それ程西洋が好いとも思
わない、然し日本には演奏会と芝居と図書館と画館がな
いのが困る、それだけが不便だと云われた。一年位暇を
貰うって遊んで来てはどうですと促がしてみたら、そりや
無論遣やって貰える、けれどもそれは好まない。私がもし
日本を離れる事があるとすれば、永久に離れる。決して
二度とは帰って来ないと云われた。

先生はこういう風にそれ程故郷を慕う様子もなく、あ
ながち日本を嫌う気色けしきもなく、自分の性格とは容れ悪にくい
程に矛盾な乱雑な空虚にして安あっぽい所謂新時代いわゆるの世態

が、周囲の過渡層の底から次第々々に浮き上って、自分
 をその中心に陥落せしめねば已まぬ勢を得つつ進むの
 を、日毎眼前に目撃しながら、それを別世界に起る風馬牛
 の現象の如く余所に見て、極めて落ち付いた十八年を
 吾邦で過ごされた。先生の生活はそつと煤烟の巷に棄
 てられた希臘の彫刻に血が通い出した様なものである。
 雑鬧の中に己れを動かして如何にも静かである。先生の
 踏む靴の底には敷石を噛む鋏の響がない。先生は紀元
 前の半島の人の如くに、しなやかな革で作ったサンダル
 を穿いて音なく電車そばの傍を歩いている。

先生は昔し鳥を飼っておられた。何処から来たか分らないのを餌^えを遣って放し飼にしたのである。先生と鳥とは妙な因縁に聞える。この二つを頭の中で結び付けると一種の気持が起る。先生が大学の図書館で書架の中からポーの全集を引き卸したのを見たのは昔の事である。先生はポーもホフマンも好きなのだと云う。この夕^{ゆうべ}その鳥の事を思い出して、あの鳥はどうなりましたと聞いたら、あれは死にました、凍えて死にました。寒い晩に庭の木の枝に留ったまんま、翌日^{あくるひ}になると死んでいましたと答えられた。

鳥の序ついでに蝙蝠こうもりの話が出た。安倍君が蝙蝠は懐スケプチック疑な鳥だと云うから、何故なぜと反問したら、でも薄暗がりにはたはた飛んでいるからと謎なぞの様な答をした。余は蝙蝠の翼はねが好だと云った。先生はあれは悪魔の翼だと云った。成程画えにある悪魔は何時でも蝙蝠の羽根を脊負しよつている。

その時夕暮の窓際に近く日暮しが来て朗ほがらかに鋭どい声を立てたので、卓を囲よつたりんだ四人はしばらくそれに耳を傾けた。あの鳴声にも以太利イタリアの連想があるでしょうと余は先生に尋ねた。これは先生が少し前に蜥蜴とかげが美しくしいと

云ったので、青く澄んだ以太利の空を思い出させやしませんかと聞いたら、そうだと答えられたからである。然し日暮しの時には、先生は少し首を傾むけて、いやあれは以太利じゃない、どうも以太利では聞いた事がない様に思うと云われた。

余等は熱い都の中心に誤って点ぜられたとも見える古い家の中で、静かにこんな話をした。それから菊の話と椿の話と鈴蘭の話をした。果物くだものの話もした。その果物のうちで尤も香りの高い遠い国から来たレモンの露しぼを搾しぼって水に滴したたらして飲んだ。珈琲コーヒーも飲んだ。凡すべての飲料の

うちで珈琲が一番旨うまいという先生の嗜好しこうも聞いた。それから静かな夜の中に安倍君と二人で出た。

先生の顔が花やかな演奏会に見えなくなつてから、もう余程になる。先生はピアノに手を触れる事すら日本に来ては口外せぬ積つもりであつたと云う。先生はそれ程浮いた事が嫌きらなのである。凡ての演奏会を謝絶した先生は、ただ自分の部屋で自分の気に向いたときだけ楽器の前に坐る、そうして自分の音楽を自分だけで聞いている。その外にはただ書物を読んでいる。

文科大学へ行って、此処ここで一番人格の高い教授は誰だ

と聞いたたら、百人の学生が九十人までは、数ある日本の教授の名を口にする前に、まずフォン・ケーベルと答えるだろう。斯程かほどに多くの学生から尊敬される先生は、日本の学生に対して終始渝かわらざる興味を抱いて、十八年の長い間哲学の講義を続けている。先生が疾とくに索寞たる日本を去るべくして、未だいまに去らないのは、実にこの愛すべき学生あるが為である。

京都の深田教授が先生の家にいる頃、何時でも閑な時に晚餐ばんさんを食べに来いと云われてから、行かずに経過した月日を数えるともう四年以上になる。漸ようやくその約を果

して安倍君と一所に大きな暗い夜の中に出た時、余は先生はこれから先、もう何年位日本に居る積つもりだろうと考えた。そうして一度日本を離ればもう帰らないと云われた時、先生の引用した“no more, never more.”とこうポーの句を思い出した。

日本文学電子図書館

文鳥・夢十夜

著 者：夏目漱石

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館